

地域と共に歩む

— 災害復興支援、ボランティア活動 —



CONTENTS

- P2-P3 — 九州北部豪雨被災地への復興支援活動
- P4-P6 — 各支社エリアでのボランティア、地域共生活動
- P7 — 九電みらい財団の取り組み
- P8 — 朝倉市・東峰村・日田市周辺MAP / Topics観光物産

「ずっと先まで、明るくしたい。」——。

九州電力グループはこの思いを実現するため、安定供給の使命を全うするのはもとより、地域・社会の課題解決に貢献する様々な取り組みを推進。7月の九州北部豪雨をはじめ大規模な自然災害の際にも、一日も早い復興に向け尽力し、ボランティア活動など地域に寄り添った継続的な支援を行っている。

支援活動

朝倉市・東峰村へ 支援物資提供 [福岡支社]

福岡支社(豊馬誠執行役員・支社長)は九州北部豪雨で被災した地域に6日と7日、支援物資を提供した。福岡県朝倉市にトイレ材1000個、毛布30枚、非常食582食、水(2リットル)390本を、東峰村にトイレ材500個、毛布200枚、非常食1020食、水(500ミリリットル)1992本をそれぞれ運び、避難所生活を支えた。

10日には東峰村へ非常食1020食を追加するとともに、村内の避難所で炊き出しも実施。甘木営業所(安藤浩泰所長)の所員など10人が、1日クッキングヒーターを持ち込み、豚汁とおにぎり130食分を提供し



東峰村役場に支援物資を運び入れる社員

九州電力では、7月5日に発生した九州北部豪雨災害の被災地支援として、九州各県からボランティアバスを運行し、計12回、延べ300人を超えるボランティアの派遣や被災地産品の販売・斡旋など、グループ一体で継続的な取り組みを進めている。

た。住民からは、「災害対応など忙しい時に、炊き出しをしてくれてありがとう。カップラーメンばかりで飽き飽きしていたところで、大変おいしかった」と声を掛けられた。

また、朝倉市で災害復興ボランティアを計3回、延べ79人が参加して実施。家屋に流入した土砂のかき出しや

被災地への募金活動

九州電力は九州北部豪雨の被災者を支援するため福岡県と大分県に対して九州電力グループによる寄付金と従業員から集まった募金を贈った。福岡県には約3200万円、大分県には約930万円を贈呈した。福岡では、8月31日に県庁で贈呈式が行われ、豊馬誠・福岡支社長と福岡電力関連産業労働組合総連合の矢田信浩会長が出席。大曲昭恵副知事に目録を手渡した。大曲副知事は「被災された方々に皆さんの思いを届けさせて頂く」と述べた。

一方、大分では9月5日に県庁で贈呈式を開催。栗山嘉文・大分支社長、大分県電力関連産業労働組合総連合の矢野正一会長らが出席し、安東隆副知事に目録を手渡した。安東副知事は「九州電力も多大な被害を受けたにもかかわらず、県のために義援金を頂いたことに感謝する」と謝意を伝えた。



安東大分県副知事(右)に目録を手渡した



大曲福岡県副知事(左)に目録を手渡す豊馬支社長(中央)

日田市などでのボランティア [大分支社]

大分支社(栗山嘉文執行役員・支社長)は、九州北部豪雨で被害を受けた大分県日田市で災害復興ボランティアを計3回、延べ59人が参加して実施したほか、支援物資の提供などを行った。災害復興ボランティア活動は7月25、26日に大鶴地区で実施。一般のボランティア参加者が少なくない

る平日に行い、支社エリアの社員計32人が参加した。活動では、家屋に流入した土砂のかき出しや縁側のガラス清掃などを行い、家主からは「仕事を休んでまで来てもらい、本当にありがたい」「ボランティアセンターの担当者からも「ボランティアが不足する平日に、団体で来て頂きとても感謝している」などの言葉が寄せられた。9月30日にはグループ会社からの参加も得て計27人で、側溝の泥のかき出しなどを行った。



ボランティアではガラス清掃も行われた

がれきの撤去といった活動を行った。
一方、避難所の環境改善のため、九州電力グループの西日本プラント工業（福岡市、平田宗充社長）が朝倉市と東峰村の避難所7カ所にスポットクー

ラー21台を設置した。住民からは「冷房がなく暑くてしかたなかった。道なき道を歩いてスポットクーラーを設置しに来て頂き、とても感謝している」と謝意の言葉が寄せられた。

また、日田営業所（阿部繁喜所長）では、7月初旬に市内5カ所の避難所を訪問し、熱中症対策用のうちわと飴（あめ）を「暑さに気を付けてください」と一人一人に声を掛けなが

ら手渡した。併せて、自宅に戻った際に電気を安全に使用して頂けるように、屋内ブレイカーの操作手順などを記載したチラシを配布した。
同支社では9月の台風18号で大

きな被害を受けた、津久見、佐伯、臼杵市でのボランティア活動も同月23日に実施。グループ大で25人が参加し、床下の泥のかき出し作業などに汗を流した。



初日に行われた災害ボランティア活動。約5時間かけて土砂のかき出しなどの作業を完了させた

九州電力はグループ会社の九電旅行サービスと共同で9月1日から2日間、九州北部豪雨の被災地域で「トリプルボランティアツアー」を企画した。これは、グループ会社の九電旅行サービスとともに災害ボランティア・観光情報発信の3点で被災地を支援する取り組み。土、日曜日に比べてボランティアが少なくなる平日に被災地に入り、被災家屋の片付けなど災害ボランティアを実施。災害の影響で宿泊客のキャンセルが相次ぐ被災地周辺の宿泊施設に宿泊し、翌日は周辺を観光する。ツアーを終えた後は、被災地の現状や観光地の魅力をSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）などで発信するというものだ。

今回のツアーには、九州電力やグループ会社の九電オフィスパートナーなどから社員が参加した。初日、参加者は朝倉市杷木のボランティアセンターで受け付けを済ませ活動場所へ移動。住宅の裏に流れ込んだ土砂などを撤去する作業に懸命に取り組んだ。重機が入れない場所を中心に、乾いて固まった土砂をスコップで掘り起こし、バケツで屋外に運び出した。強い日差しの中、声を掛け合い、約5時間をかけて作業を完了した。熱中症防止のため適宜、休憩を取りながらの作業だった。家主からは「短時間で、こんなにきれいになるとは思わなかった」と感謝の言葉が寄せられた。

夜は被災地域にある筑後川温泉（福岡県うきは市）に宿泊し、疲れた体を癒やした。2日目は、朝倉市のシンボルで豪雨被害を乗り越え復活した「三連水車」を見学。東峰村では、伝統工芸品である小石原焼の窯元で陶磁器を購入した。参加者はSNSでの発信のほか、「お土産を知人に配る際に被災地の様子を伝えたい」と口コミによる情報拡散も忘れない。



10月19日から発電所構内への流木の受け入れが開始された

九州電力は九州北部豪雨で発生した流木の受け入れを、苓北発電所（熊本県苓北町）で10月19日から始めた。同社では「被災地の一日も早い復興のためにも、流木の処理は非常に大切な仕事」（瓜生道明社長）との思いから、流木の受け入れを決めた。

流木は、丸太の状態で苓北発電所に搬入。所内でチップに加工し、石炭と混ぜて発電用燃料として利用する。福岡県の推計によると豪雨で発生した流木は20万5000トン。九州電力では2019年3月までに最大5万トン、全体の約4分の1を引き取ることが可能だ。

九州電力が発電用燃料の一部として流木を受け入れるのは初めて。苓北発電所の上枡正則所長は、流木を受け入れるスキーム構築は「ゼロからのスタートだった」と振り返る。

チップに加工する破砕機にかけやすくするために処理を行った流木を積んだ最初の輸送船が長洲港（熊本県長洲町）から出港したのは10月16日だった。発電所に受け入れた丸太は構内貯木場に保管。導入した破砕機で直径4〜5センチのチップに加工して混焼する。

地域共生活動

北九州支社の 取り組み

九州の豊かな森を ずっと先まで残していくために

プレイフォレスト

「PlayForest(プレイフォレスト)」は、2016年度から始まった、子どもたちに森に親しんでもらう環境イベント。九州電力各支社が中心となり毎年開催している。「自然を守る、学ぶ、楽しむ」をコンセプトに、森を大切にすることを育むことで九州の豊かな森を未来まで残したいという同社の思いが込められている。

参加者募集開始から数日で定員に達するほどの人気ぶり、16年度は、全社で4千人を超える小学

生とその保護者がプレイフォレストに参加した。

17年10月1日に北九州市内で開催された「プレイフォレスト2017 in 山田緑地」には、親子連れなど約800人が参加した。

来場した子どもたちは、受け付けを済ませると、はやる気持ちを抑えてまずはオリエンテーション会場に向かった。スライドや小道具を用いた分かりやすい説明で、森の大切な役割である生物多様性保全機能や、水源涵養(かんよう)機能、土壌保全(かん)砂災害防止機能などについて学んだ。

オリエンター



「マイ箸作り」などが行われた環境体験ブース

シオンが終わると、子どもたちは一斉に環境体験ブースに散らばった。地域のNPO団体などに協力を得て出展されたブースは17。木工クラフト作りや、ピザ作り、ロープを使った木登りや薪割り体験など、どれも楽しみながら森の恵みを体感できるメニューだ。九州電力からも、グループ会

社の九州林産(福岡市、古賀稔久社長)が管理する社有林の間伐材を活用した「マイ箸作り」を出展。子どもたちは社員のやさしい指導を受けながら、慣れない手つきでカンナを引いていた。

穏やかな秋の日曜日。精いっぱい、森で学び、森を楽しんだ子どもたちは、少し疲れた様子で、お父さん、お母さんに手を引かれながら会場を後にした。

佐賀支社の 取り組み

地域の一員として、 地域を盛り上げて いくために

「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」への協力

「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」は、佐賀市の嘉瀬川河川敷をメイン会場として毎年開催されている熱気球の国際的な競技大会。今年も、11月1～5日に開催された。秋の風物



九州電力のバルーンにはメディア関係者が搭乗し、上空からの撮影を行った

詩であるバルーンをひと目見ようと集まった観客は延べ88万6千人にも上った。世界トップクラスのバルーンニストによる熱戦に加え、様々な催しが開催された。

九州電力からも5日間で延べ93人の社員がボランティアとして参加。ボランティアスタッフは、アニメや映画の人気キャラクターが巨大バルーンになって登場する「バルーンファンタジア」の運営を手伝い、キャラクターバルーンの立ち上げや撤収作業を行ったほか、同社バルーン部は、同社のバルーンにメディア関係者を搭乗させるなどの形でサポート。また、大会中にバルーンが電線に接触することがないように、佐賀と福岡エリアの社員延べ138人で、事前説明会やパトロールを実施した。

「駅北くまやかFES」を開催

九州電力佐賀支社では、2016年度から「こらぼらQでん」の一環であれあい町づくり実行委員会との協働により、佐賀駅北の地域活性化を目的とした取り組みを行っている。今年も、10月29日(日)に「駅北くまやかFES」と銘打って開催。駅北の7

つの会場で、様々な団体、店舗の協力を得ながら、約50ブースが出展し、悪天候ながらも、1800人を超える来場者を迎えた。来場者は、スタンプラリーを片手に、佐賀県産品等を味わえるフードエリアや地元の高校による開発商品PRブース、地域

の福祉事業所による想いのこもったお菓子等の販売ブースなどを周遊。同社からも、芋掘りやIH料理教室、科学実験教室などを出展し、佐賀駅北を大いに盛り上げた。

今回のイベントは2月から準備を開始。合計20回もの事務局会議を重ね、地域の方々と一緒にイベントを創り上げた。

同社佐賀支社では、地域のイベントへの協力、協働を通じて、今後とも地域の活性化につなげていく予定だ。



フードエリアでの地元店舗による販売



同社生物資源研究センターでの芋掘り体験



家族が参加したIH料理教室



撤収作業などの運営サポートも行った

各支社の代表的な

長崎支社の 取り組み

地域との信頼関係を 深めるために

長崎ペーロン選手権大会出場

長崎では、夏の伝統行事として「長崎ペーロン選手権大会」が長崎港で開催される。ペーロンは木製手こぎ船を使って往復1150mのコースでタイムを競うレース。職域対抗レースには九州電力を含む12チームが出場して熱い戦いを繰り広げた。九州電力は4事業所から34人が参加し、一丸となって權（かい）をこぎ続けた。予選では長崎市役所など対戦。レース展開は好調だったものの折り返し地点でブイの内側をターンしてしま

まい、失格となった。その後、敗者復活戦で勝利して準決勝に進んだ。

準決勝は九電工やJパワー（電源開発）、西部ガスなどと対戦し、2着で決勝に進出。決勝は4着と健闘した。3月中旬から練習を始め、筋力トレーニングや海上練習を積み重ねてきた成果が表れた。

同社長崎支社は1993年から職域対抗レースに参加しており、今年で25回目。地域との関係を深める取り組みとして今後も参加していく予定だ。



日頃の練習成果を発揮し、決勝では4着と健闘した

重要文化財等の配線および避雷針点検活動

長崎支社では、九電工長崎支店、九州電気保安協会長崎支部とともに、毎年11月、長崎県内における重要文化財等の配線

および避雷針の点検活動を行っている。

この活動は、1970年に開始。当初長崎市内で実施してきた活動が、最



大浦天主堂をはじめ重要文化財の配線・避雷針点検を行った

近では長崎県内に広がっており、今年で48回目になる。木造建築物がほとんどであり、火災が発生すると焼失してしまう恐れがあるため、意義深い取り組みとして地域から評価されている。

長崎市には、大浦天主堂をはじめ、歴史的建築物が数多く存在し、点検活動の対象はこれらの国宝などを含め18カ所に上る。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録に向けた動きも活動が広がる後押し

になった。

長崎市内での点検活動は、点検当日の約2カ月前から準備を始める。当日は、九電工が絶縁抵抗測定、保安協会が避雷針の点検、九州電力が取材対応を実施。九電工、保安協会ともに熟練の技術で、流れるように作業を進めていく。ただ早いだけでなく、地域の宝を守るという気持ちで、一つ一つの作業を丁寧に。配線および避雷針点検活動は、同社グループがこれまで培ってきた技術を

熊本支社の 取り組み

被災者の健康的な暮らしに向けて



ホームアドバイザーによる調理実演

仮設団地で健康・料理教室

熊本支社では、2016年に発生した熊本地震により、仮設団地に入居されている被災者の方々を対象に、入居者同士のコミュニティ形成や健康増進を目的として、今年5月からおおむね月1回のペースで健康・料理教室を開催している。

健康・料理教室では、同社保健師による血圧測定や震災後のこころのケアに関する講話や、管理栄養士による食事の基本に関する講話を中心とした健康教室、ホームアドバイザー

評価を頂いている。

8月30日に嘉島町で同教室を開催した際には、嘉島町地域支え合いセンター（仮設団地の運営管理者）からも健康教室の内容について高い評価を頂き、継続的な開催を希望されたことから、嘉島町内全仮設団地で開催することとなった。

加えて、11月からは、仮設団地入居者からのニーズが高い管理栄養士による健康講座に電子レンジを用いた簡単レシピの実演を追加して開催している。

同社熊本支社では、今後も熊本県の「創造的復興」に寄与する活動に取り組んでいきたいと考えている。



屋内配線の点検作業

地域のために役立てることができると貴重な機会であり、今後もこの活動を通じて地域の宝である重要文化財等の保全に貢献していくこととしている。

ザーによるIHクッキングヒーターを用いた料理教室等を行っている。

参加者からは、「日頃、見落としがちな食や栄養に関する気づきを得られた」「教えてもらった料理を家でも作ってみたい」「IHクッキングヒーターの火力やタイマー機能は魅力的」など高い



栄養と食事の基本などをテーマに行われた健康講座

各支社の代表的な地域共生活動



宮崎支社の 取り組み

私たちの職場を 子どもたちの居場所に

日南子ども食堂を オープン

日南市の花である「つわぶき」の花言葉は、「困難に負けない」「困難に傷つけられない」。「日南子ども食堂 つわぶきの会」は、子供たちに自分たちの居場所と思える場所や食事の提供を行っている。今年9月に、同団体と、地域に開かれた事業所づくりに取り組む九州電力、子ども

もの支援に力を入れていて日南市、3者の思いが結実し、「日南子ども食堂」の開設に関する協定を締結。同社日南営業所のコミュニティスペースを活用して、毎月第4土曜日に食堂を開設していく予定だ。

9月30日、記念すべき第1回「日南子ども食堂」がオープン。食材は、お米に豚肉、ピーマン、チョウザメ、みかんなど新鮮な食材を地元農家が提供。

その食材を「つわぶきの会」のボランティアスタッフがI



日南営業所のコミュニティスペースで行われた「日南子ども食堂」



つわぶきの会、日南市、九州電力の3社で協定が締結された

Hクッキングヒーターを使って手際よく調理。10品ほどの料理がビュッフェ形式で並べられ、地域の子どもや大人と一緒に食卓を囲んだ。調理の間は、日南高校の生徒がキッズコーナーで育児支援。地域の様々な主体、世代が協力し、子どもたちの居場所を創り上げることができた。

同社宮崎支社では、今後も、営業所を子どもをはじめ、地域の方々が足を運びたくなるような魅力的で地域に開かれた場所に変えていきたいと考えている。

鹿児島支社の 取り組み

地域の方々と一緒に、 竹林を整備し、 安全安心な街づくり

「いらぼらQでん」

鹿児島支社では2016年12月、日置市の深固院(しんこいん)跡で、町内会や地域のNPOと協働で、竹林整備ボランティアを行った。深固院跡は、鹿児島で有名な「しんこ団子」の発祥の地としても知られている。「高齢化などの影響で放置竹林の整備が進まずに困っている」という地域の声を耳にしたことから、協力する運びとなった。

当日は、樹木伐採を専門とする関係会社にも参加してもらい、30人程度で作業を実施。2時間あまりの作業で、数十本の竹を伐採し、地域の方々から「なかなか手が回らなかった作業を手伝ってもらい、大変助かった」という感謝の言葉を掛けられた。

同月末には、伐採した竹を活用した子ども向けイベントを開催。同社の「三門松竹とんぼ竹ぼうくり」ブースを含め、8団体がブースを出展し、市内の家族連れ、約1200人に楽しんでもらった。イベント会場は、廃校となった扇尾小学校。コミュニティスペースとして活用したいという地域のニーズをくみ上げ、会場として使わせてもらった。

同社鹿児島支社では今後も、NPOなど地域の団体の協力を得ながら、地域の方々と一緒に地域課題の解決を図る「いらぼらQでん」の取り組みを、九州各地で展開していくこととしている。



伐採した竹を活用した竹とんぼ作り



町内会や地域のNPOと協働で行われた竹林整備ボランティア



手作りの竹ぼうくりと一緒に遊ぶ親子

九電みらい財団の取り組み

財団の概要と活動実績

「環境活動」 「次世代育成支援活動」を展開

九州電力は、地域の皆さまの期待に応え、地域の課題解決に貢献する活動をさらに充実させるため、環境活動と次世代育成支援活動を行う「一般財団法人九電みらい財団」を2016年5月に設立した。

環境活動では、くじゅう坊ガツル湿原（大分県竹田市）一带において、湿原の植生や高山植物を守るため、地域の方々と九州電力グループの社員やその家族で行う「野焼き」などの「環境保全活動」を実施。また、九州電力の水源かん養林「くじゅう九電の森」（大分県由布市）において、地球温暖化の現状や森林の持つ役割について学ぶ講話

と、森林観察、間伐体験などの体験プログラムから成る「環境教育活動」を実施。小中学生を主な対象とし、九州電力グループの九州

林産と連携して取り組んでいる。「次世代育成支援活動」では、地域の諸団体が取り組む次世代育成支援活動への助成を実施。これまで、子どもたちが地域の文化を学び、伝統芸能を体験する活動や放課後の居場所づくり、育児に悩む親同士のコミュニケーション機会の提供などに取り組む40の団体に対し、活動費の助成を行っている。

九電みらい財団は、こうした活動を通じて、「ずっと先まで、明るくしたい。」をブランドメッセージとする「九州電力の思い」の実現に取り組んでいく。



坊ガツル湿原での野焼き



一般財団法人
九電みらい財団
ずっと先まで、明るくしたい。



「くじゅう九電の森」での間伐体験

代表理事コメント

地域とともに活動 着実に

田中 徹氏

一般財団法人九電みらい財団
代表理事

九州電力 ビジネスソリューション統括本部
地域共生本部 総務部長



当財団は、地域の皆さまやお客さまなどステークホルダーの期待に応えるため、環境保全、環境教育などの「環境活動」と、子どもたちの健やかな成長を応援する活動への助成を行う「次世代育成支援活動」に取り組んでいます。

設立から2年目となる2017年度は、各活動を充実。環境保全では、坊ガツル湿原をより多くの人に知って頂く、登山ツアーの企画や、ガイドマップの製作を行いました。環境教育では、活動の実施体制を見直すことで規模の大きい学校でも受け入れることができるようになり、約

1300人の方に参加して頂きました。この活動は今年10月に林野庁が後援する「Forest Good〜間伐・間伐材利用コンクール〜」において特別賞を受賞するなど、高い評価を頂いています。

次世代育成支援活動では、助成金の贈呈だけでなく、団体の活動を財団スタッフが取材し、ホームページ上で公開したところ、全国から活動への賛同や応援のコメントが多数寄せられるなど、大きな反響がありました。

助成先団体の中には、助成をきっかけに九州電力の事業所と協働で活動を行うケースも生ま

れており、こういった点も他の助成事業にはない取り組みとして評価して頂いています。

このほか、ホームページやフェイスブックに加え、インスタグラムを立ち上げ、また、オリジナルカレンダーを製作するなど、財団の認知度向上に取り組んでいます。

おかげさまで、これまでの活動は順調に推移して参りましたが、これに甘んじることなく、今後とも様々な地域や人、団体とのつながりを大切にしながら着実に活動を進めることで、九州の豊かな地域・社会づくりに貢献していきたいと思えます。



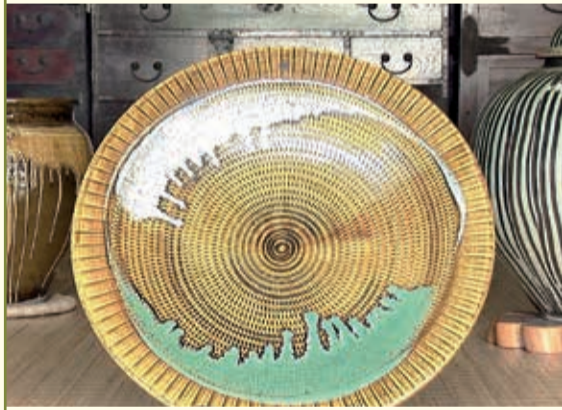
観光物産

原鶴温泉



筑後川のほとりにあり、対岸には耳納連山を望む風光明媚な朝倉市の温泉街。豊富な湧出量を誇り、弱アルカリ性で硫黄が混ざる泉質は「美肌の湯」と呼ばれ、女性を中心に人気が高い。

小石原焼



生活の中で使われる陶器として、「用の美」を確立した小石原焼(こいしわらやき)。「飛び鉤」「刷毛目」などの歴史的技法で表現される独特の文様が特徴で、東峰村には約50の窯元がある。

日田市豆田地区



江戸時代、幕府直轄の天領地で、城下町として栄えたエリア。現在も、江戸、大正、昭和初期に建てられた歴史ある商家、町家や土蔵、格子窓が連なり、レトロな雰囲気街並みは「大分の小京都」と呼ばれる。

秋月城下町



国の重要伝統的建造物群保存地区の一つで、城下町として町全体が指定されているのが秋月の特長。町割り、城館跡、武家屋敷などが自然景観と調和し、桜、紅葉の名所としても知られる。